

日常的な書字スリップからみた日本語の書字過程

仁平 義明

(東北大学 教養部)

<目的>

われわれが日常場面で犯す、書こうと意図した字以外の文字を書いてしまう誤り(書字のスリップ)を分析した。その第一の目的は、日本語で文字が書かれるにいたる認知運動過程を推測し、その過程のモデル構成を試みることにある。第二の目的は、これまで行為のスリップの要因に関する仮定として受け入れられながらも実証されなかった「頻度假説」および「新近性仮説」を検証することである。つまり、「(1)ある行為に伴って、意図した行為のスキーマ(記憶ユニット、プログラム)とリンクしている別な行為のスキーマが活性化され、(2)運動して活性化された行為のスキーマの使用頻度が意図したものの使用頻度より高い場合(頻度假説)、または最近使用されたばかりで活性化が残存している場合(新近性仮説)、後者のスキーマ(プログラム)がトリガーされやすくなり、スリップがあらわれるという仮説」を検証することである。

<方法>

大学生119名が、自分が一日間に犯した書字のスリップ(自分が書こうと意図したものとちがう結果になったエラー)を、そのときの書字条件や前後の文脈を含めて記録した。

<結果と考察>

1. スリップの内容: 合計649例(1人平均5.5、SD6.1)が収集された。主なエラーの内容は次の通りである。

「表記体エラー」(例;ターボ式(意図)→ターボシ(エラー); それで→それd)

「別字への変移」

意味性エラー(例;夢→雲)

形態性エラー(例;徳→後)

音韻性エラー(知る→死;人口→人公)

複合要因性エラー(術→述(音韻+形態); 罪→罰(形態+意味))

「部品の別字への変移」(例;婆さん→~~婆~~)

「活用エラー」(例;そのように→そのようだ)

「助詞エラー」(例;-を→-と)

「熟語性エラー」

単純性(例;自分→自由)

複合性(例;普通→普通(+形態性); 原始→原子(+音韻性))

「文字の脱落または先取」(例;社会学→社学学)

「文字の入れ替え」(例;会合→合会)

「文字の要素の入れ替え」(例;響→~~響~~)

「融合」

文字間の要素融合(例;勝ち→~~勝~~か; 動かす→~~動~~か)

文字内の要素融合(例;礼→~~礼~~)

「前の書字の活性化の残存」

反復エラー(例;論理→論論)

他のエラー要因との複合(例;借金を全部→借金を金)

「その他」(濁点エラー、二重エラーなど)

2. スリップから推測される書字の認知-運動過程

出現したスリップの内容から、日本語の書字過程の要素として、少なくとも次のものが考えられる。

①書こうとする問題領域に関連する全意味野の広範な活性化、②文脈からのおおまかな意味の構想と構文、③部分的な意味の選択(意味記憶の活性化)、④意味に適切な品

詞と語の選択と活用、変形、⑤適切な音韻(非特殊的音韻情報を含む)の活性化、⑥表記体(漢字、ひらがな、カタカナetc)の選択、指定、⑦文字(grapheme-alligraph)の選択、⑧文字の非特異的な構成情報による字の要素配置指定(+文字の視覚表象の活性化)、⑨文字の構成部分要素のウインドウサイズの指定、⑩文字の運動記憶(運動プログラム)活性化、⑪運動プログラムの各種パラメータ(サイズ、スピード、傾きなど)の指定、筋肉運動への変換の指定(運動プログラムの明細化)、⑫運動プログラムのトリガリング(と抑制)

上記のスリップのタイプの分布には書字の条件(自発書字、費取、写字など)による違いがみられ、日本語の書字過程は一樣なものではないと考えられる。

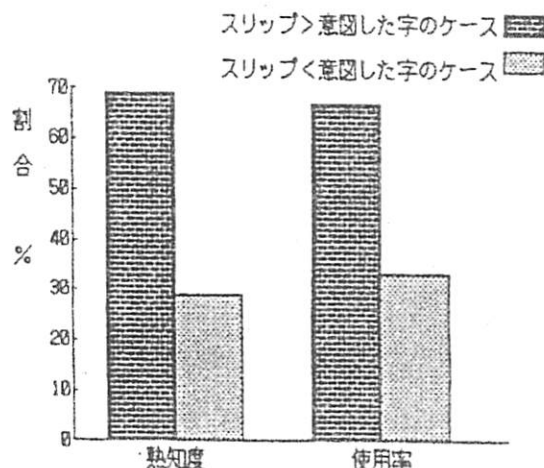


図1. 意図した文字とスリップとしてあらわれた文字の使用頻度の差(形態性エラー(例;徳→後)の場合)。(熟知度および使用率は海保・野村(1983)による。)

3. スリップの原因の「頻度假説」の検討

スリップとして現れた漢字と書こうと意図した漢字の、使用頻度を比較した。「形態性」スリップ(例;徳→後)では、文字自体の使用頻度、熟知度ともに、スリップとして現れた文字の方が意図した文字より高い場合が多い(図1)。スリップ発生の「頻度假説」は裏付けられるといえる。さらに、運動シーケンスの分析から、この形態性のエラーは視覚的な形態の類似ではなくむしろ運動シーケンスの形態的類似によるものであることが示唆された。「音韻性」のスリップ(例;人口→人公)には、このような文字自体の熟知度や使用率の差は認められず、音韻から文字(運動)へのルートの頻度が影響すると考えられる。

4. スリップの原因の「新近性仮説」の検討

どのタイプのエラーでも、少し前に書いた文字の活性化の残存の影響が少なからずみとめられる。

5. 活性化の加重によるスリップの発生

スリップの発生原因は、いくつかの活性化要因の複合が推測される場合が多い。すなわち、いくつかのちがったルートからの活性化が加重されていき、スリップが発生している場合が多い。例えば、熟語性のエラーをみると、単純性のエラーは10.7%にすぎず、複合性のエラーはおおよそ9割にのぼる。活性化の加重がスリップには大きく働いていることが示唆される。